

合唱団ホームページアドレス <http://www.wiengifu.org>

音楽とは 横への感性なり!

8

月号

2020年8月1日
編集・発行/
ウィーン岐阜合唱団

コロナ禍での合唱活動の模索

ウィーン岐阜合唱団 団長 臼井 博育

瀬戸市出身の高校生棋士 藤井聡太七段が将棋の第九十一期棋聖戦で、タイトル獲得の17歳11ヶ月という最年少記録を更新したニュースは、梅雨前線の豪雨による各地への甚大な被害、コロナ禍による自粛した生活を余儀なくされている私達にとって久々の明るい話題となりました。

17歳にして将棋の8大タイトルの一つである棋聖を獲得したコメントが、更なる道を探り究めると言うものでした。居並ぶ超強豪プロ棋士をバツバツと倒し棋聖戦の挑戦権を得、現在最強棋士と称される渡辺明 前棋聖に勝ち見事棋聖位を奪取しました。その渡辺 前棋聖をして“凄い人が出てきた”と言わしめました。

さて、私達も道を探るとまではいかないですが、長い自粛生活を経てやっとこの7月から待ち望んでいた合唱活動の再開を果たすことができました。

ただここ最近のコロナ情勢は、東京の連続3桁を初めとして全国各地で感染者が頻発しており7月18日の国内新規感染者は663人に上りました。県内は、岐阜市の高校によるクラスターが18日現在6人の新規感染者があり県も危機感を強めています。そのようなコロナ環境の中、私達ウィーン岐阜合唱団執行部は6月22日、7月1日と平光先生を交え7月2日に練習を再開するに当たって有効なコロナ対策を検討して来ました。まず、重要な事は県、市が出しているコロナ対策の指針であるマニュアルを私達がきちっと読み解き、マニュアルに沿った合唱活動を再開することでした。そこには最も3密になりやすい合唱活動に対する細かで、厳密な約束事が書かれてありました。

検証と確認の意味も含めマニュアルが求めていること、私達が更に付け加えたことを列挙してみたいと思います。

【市のコロナ対策・マニュアル】

- ・利用者から感染者が出た場合に、岐阜市保健所の調査に迅速に協力できるよう、利用者全員の連絡先を毎回把握し、出席簿を提出できるように作成、保管
- ・毎回の出席簿の作成(氏名、連絡先、検温結果、2週間以内の発熱、受診や服薬を漏らさず聞き取り記入する)
- ・長森コミセンの大ホール収容人数は200人であるが、コロナ禍における利用は100人まで許可する

【ウィーン岐阜合唱団のコロナ対策】

- ・大ホールの使用人数は100人までOKとあるが、団としては万全を期して前後左右2m間隔で最も安全、安心が担保されると思われる50人以下で練習を取組みます
- ・少人数、短時間での合唱活動
- ・大ホール入り口での非接触型体温計による検温
- ・各室入口に消毒液を置き手指の消毒をする
- ・歌う時もマスクの着用(常時着用)
- ・1時間に2回以上の換気(常時換気)
- ・会話も必要最小限で対面を避ける
- ・大声を出さず、咳、くしゃみ等エチケットを守る
- ・机、椅子、ピアノ等の消毒を行う
- ・座っている団員、立っている団員と混在しない
- ・椅子は必要最小限とし直接床に座る、椅子の必要な方はOK
- ・練習会場でのおやつ(あめ、チョコレート等)、食事等の禁止、但し飲み物は可
- ・責任者は以上の項目のチェックシートを毎回、施設に提出すること

今年、長期予報にありますように猛暑が予想されます。

- ・適度な運動による暑さに備えた身体づくり
- ・日頃から体温測定等の健康管理
- ・練習中ものどが渇く前にこまめな水分補給、1日当たり1.2Lを目安に
- ・大量に汗をかいたら塩分も忘れずに

私達執行部は、上記の件を確実に、また更に実情に合わせ付け加え、見直しを含め実施して来ました。

このコロナ禍の中でも、「合唱ができる喜びを分かち合い、命を守り、自分にうつらない、人にうつさない」を大前提に団運営を実施します。また今後、市の施設の利用を断られることのないようにマニュアルを厳守していきます。

終わりに、7月19日(日)中日新聞に「負けるな！市民の第九」と題して社説が掲載されましたので一部抜粋して紹介いたします。

冒頭に『今年はベートーベンの生誕 250 年ですが、泉下の楽聖も寂しがおられるでしょう。各地の市民合唱団の「第九」がピンチに陥っているためです。本番は大体年末ですが、練習開始はこの時期。ところが団員募集の停止や公演中止が相次いでいます。その原因は、コロナ禍。練習も本番も「3 密」を招く懸念があるからです。普通の市民がドイツ語の第九を暗譜で歌う。コロナは、そんな日本独自ともいえる市民文化をも浸食しています』記事の中で「一ステージで歌う喜び」として『昨年、こまき第九合唱団に参加した元会社員の桜井義弘さんは 10 年ほど前に、他の合唱団で家族と第九を初めての歌い、やみつきになりました。「最初は、がなるだけ。年ごとに「周りの歌声も聴く」など目標ができます」と話し、継続の大切さをにじませています。「ザイト ウムシュルンゲン ミリオーン(抱き合おう、何百万もの人々よ)！」第九の歌詞の一節です。今も心の中でなら抱き合えます。たとえ今年の練習や本番は無理でも、長い時間をかけて根付いた「誰でも第九」の文化自体は手放したくないものです』と記事を締めくくっています。

みなさ〜ん!! 新聞もメールを送ってくれています。私達も 20 年以上に亘って平光先生、諸先輩方が築いてこられたウィーン岐阜合唱団、第九の文化を絶やすことなくこれからも共に発展させ、火を灯し続けましょう!!!

私の音楽遍歴

〜平光 保先生との出会い〜

名古屋モーツァルト協会 幹事 竹内 精司

(第9回ヨーロッパ音楽友好の旅 カウナス:参加)

私のピアノの始まりは、高校に入学した時、母親が家庭用のアップライト・ピアノを購入してからです。しかし、それは私のためでなく、10歳下の弟に習わせるためでした。自宅が開業歯科医院のために母親は主婦業以外に受付や事務仕事に忙しく、長男である私が弟の手を引っ張ってレッスンに連れて行くのです。弟がレッスンを受けている間、学校の勉強や宿題をするという生活が2ヶ月くらい続きましたが、どうも弟はやる気がない。それで弟に「お兄ちゃんがピアノを弾いてもいいかい?」と聞いたところ「別にいいよ」という返事なので、ピアノのキーをたたいてみたところ、こんな面白いものはないと感激し、それから弟をほっておいて自分がレッスンに通うことになりました。まずバイエルを一通りやり、つぎはチェルニーやハノンを練習です。ピアノのお稽古が始まったのを知った同級生からは、『男のくせに、ピアノなど弾くのか』と揶揄われたものです。しかしそんなことは気も留めず、時間があれば練習したものです。と言っても、受験校でもあったので、担任の先生から『高校三年生になったらレッスンに通うのは止めなさい』といわれ、結局約2年間でレッスンは終了となりました。

親の勧めで(強要で?)、東京医科歯科大学の歯学部に入部はしましたが、決して歯科医師になりたかったわけでもないの、夏休みや冬休みに自宅に帰ってピアノに触れるのが何よりの楽しみでした、大学院での研究を修了し、歯科大学病院の助手生活を送るようになり、やはりピアノを弾きたいという思いに駆られ、アップライト・ピアノを購入し、当時住んでいた柏市の狭いマンションの一室を占領する羽目になりました。と言っても、ピアノ教師について練習することもなく、昭和53年の秋の父親の突然の死で、東京都と千葉県での13年間の生活を修了し、名古屋の父の歯科医院の跡を継ぐことになりました。その後は、慣れない開業医師の生活に追われ、ピアノどころか音楽からもまるで遠ざかる生活が始まりました。

そんなある日、老眼鏡を作ってもらうために名鉄デパートの眼鏡売りの椅子で待っていた時のことです。突然ピアノの演奏が聴こえてきたのです。曲目はベートーヴェンの月光ソナタでした。その演奏がなんとも私の心に心地よく響くので、メガネを注文していることなど忘れて、もっと良く聴ける天井のスピーカーはないかと探して歩きましたら、デパートの3階のフロアで生演奏が行われていたのです。これが

平光先生との運命的な出会いのはじまりです。久し振りにピアノの生演奏に接して、俄然もう一度ピアノの練習をしたい、できればこのピアニストに弟子入りさせていただきたい。さりとて、なんの面識もないプロの演奏家に自分のような一介の素人を受け入れてもらえるのはとても無理であろう。などと思ってその日は出来上がった老眼鏡を受け取って、すごすごと自宅に帰りました。

しかし翌日になり、一大決心をして、名鉄デパートの担当部署の方に電話を入れ弟子入りしたいと思い伝えていただきました。幸い平光先生から、大変快いご返事をいただき、名鉄電車によって各務原飛行場前駅（現在は各務原市役所前駅）から田んぼの中にある先生のご自宅にピアノレッスンに通う日が始まりました。初めの頃は月に一度くらいのペースでしたが、開業医の身であるので先生のレッスン通りに弾けるようにはならず、レッスンの間隔は長くなりがちでした。それでも先生はいつも、レッスンの最後に、その日の練習した曲を弾いてくださるのですが、表情豊かで心のこもった演奏をしてくださるのです。それまでの私は、書かれた楽譜通りに、間違えないように音符を正確に弾くということばかり考えていました。しかしそうでなく、ピアノという楽器を通じて、作曲者の気持ちを汲んで表現する、たとえ練習曲であっても、そうやって音楽表現をしても良いのだということを教えられました。しかし、やはり本職の歯科医院の仕事に追われる身のため、平光先生にレッスンに通う回数がだんだん少なくなり、また先生も指揮者としての活動がお忙しくなり、いつの間にかレッスンは中断してしまいました。しかし、それでも暇があればピアノに向かって、モーツァルトのK.545のピアノ・ソナタと格闘したものです。

そのうちに、ピアノ協奏曲 24 番・ハ短調（K491）をいつかは弾いてみたいという願望がふつふつ芽生えてきました。この曲は 27 曲あるモーツァルトのピアノ協奏曲のうち、私がかつても好きな曲であり、また、最高傑作の一つではないかと思っています。そこで、自分の技倆ではとても無理であることは承知で、まずは楽譜を買い求め、暇を見つけては密かにこの難曲に挑戦していました。

当、名古屋モーツァルト協会の前吉川会長（故人）の時代も過ぎ、現、水谷会長のご尽力で、当協会の主催コンサートにココット四重奏団に演奏してもらおう企画がありました。この四重奏団は、前年の宗次ホール主催の弦楽四重奏団の全国コンクールで優勝しただけあり、とても息の合った合奏で、とりわけ第一ヴァイオリン奏者の情熱的な演奏に感激してしまいました。そしてパンフレットの演奏者の紹介欄に「平光真彌」とあるではありませんか。それで、演奏会後の懇親会で、『ひょっとしたら、お父上は、平光保という方ではありませんか』と尋ねたところ、案に違わず『そうですよ』という返事でした。

翌日、早速平光先生からお電話いただきました。30 年以上もの長期間のご無礼にも拘わらず、懐かしい先生の声が受話器から聞こえてきました。これが平光先生との運命的な第 2 回目の出会いとなりました。

先生は毎年、年末にベートーヴェンの第九交響曲（合唱付き）を中心としたプログラムの演奏会を開催されていたのです。それ以外にもいろいろな形で、地元岐阜県での音楽の普及活動に努めるだけでなく、2 年に一度は、合唱団を率いてチェコやハンガリーなどヨーロッパの主要都市で、各国の一流オケと独唱者を指揮して、ベートーヴェンの第九を中心とする演奏会を実施しておられる活躍ぶりを初めて知りました。岐阜県といえば、今では「命のヴィザ」で六千人余のユダヤ人の命を救った元外交官の杉原千畝氏が知られていますが、平成 30 年には氏がかつて領事として赴任していたリトアニアを訪問する演奏旅行の企画があり、私も同行させていただきました。

平光先生のもう一つの企画が、＜夢のプロオーケストラとの協演＞と題したものです。ピアノ教室に通っている子供や、アマチュアのピアノ、声楽、弦楽器、管楽器などの愛好家を募って、ウィーン岐阜管弦楽団をバックに、協奏曲の演奏会を行うというものです。わが国では、小さい時からピアノ教室に通う子供が非常に多いのですが、ピアノは孤独な楽器のため、他の演奏家と合奏することも少なく、ましてオーケストラと協演する機会はほとんどないのが現状でしょう。また合唱＝声楽を志す人の中にはオペラのアリアにも憧れるでしょうが、管弦楽団をバックに歌う機会もほとんどないでしょう。それで、このような日本の現状を鑑み、第一部のピアノ（ブルグミュラ）部門では、子供が習うブルグミュラの曲に平光先生が編曲したオケとの協演。第二部の声楽部門では、オペラのアリアや歌曲。第三部の指揮部門。そして第四に

8月～9月練習予定

練習時間は Aグループ 18:00～19:10 Bグループ 19:30～20:40 です。(10分前には集合しなさい)

月日	岐阜	月日	大垣
8月 6日 (木)	岐阜・大垣合同練習 長森コミュニティーセンター		(各グループ毎の開始時間)
8月13日 (木)	～お盆休暇～		
8月20日 (木)	岐阜・大垣合同練習 長森コミュニティーセンター		(各グループ毎の開始時間)
8月27日 (木)	岐阜・大垣合同練習 長森コミュニティーセンター		(各グループ毎の開始時間)
9月 3日 (木)	岐阜・大垣合同練習 長森コミュニティーセンター		(各グループ毎の開始時間)
9月10日 (木)	岐阜・大垣合同練習 長森コミュニティーセンター		(各グループ毎の開始時間)
9月17日 (木)	岐阜・大垣合同練習 長森コミュニティーセンター		(各グループ毎の開始時間)
9月24日 (木)	岐阜・大垣合同練習 長森コミュニティーセンター		(各グループ毎の開始時間)

大垣の9月以降の練習会場は、未定です。決定次第お報せいたします。

ピアノ（協奏曲）部門という構成の企画です。私もこのピアノ協奏曲の部門に平成30年9月に初めて挑戦させていただき、さらに翌年にも出演させていただきました。

それで、いよいよ再びレッスンが始まりました。30年ぶりレッスンの再開でしたが、最初に言われたのは、『君は一生懸命弾いているが、どうも指で弾いているね』という言葉でした。<ピアノは指で弾くものだ>と思っただけで練習してきた私には、一体なんのことか初めは分かりませんでした。しかし徐々に、いかに『脱力』して弾くかということが解ってきました。平光先生の『脱力理論』は、桐朋学園大学の指揮科で受けた指揮法メソッドからヒントを得て、全ての運動を伴う芸術とその美は『脱力』が鍵である、というものです。手指や腕の余分な力を抜いて、肘を固まらせないようにして、上半身の重みを利用してエネルギーをキーに伝える、そうした力の抜き方を覚えると、自然に指も早く回りだし、音色までも美しくなる、というものでした。それまで、指先ばかりに神経を集中し、<指を鍛える>練習に励んでいた弾き方がまるで間違っていたことがわかり、文字通り「目から鱗」でした。一年後の本番に向けて、初めから練習のやり直しです。

本番が近くなるにつれて、やっと念願のオーケストラと舞台の上で協演できるという期待感と、その一方で、果たしてオケとうまく合わせられるだろうかという不安感が入り混じる不思議な心境になったものです。いよいよ当日です、顧問の都築先生から頂いた『大きな音でたっぷりと弾いてください』との励ましの手紙をポケットにしまって、会場の岐阜市OKBふれあい会館に向かいました。午前中はオケとのリハーサルですが、サラマンカ・ホールに響く導入部のオケの音色の素晴らしさにうっとりしてしまい、自分が出るのをうっかりしてしまうほどでした。それで午後の本番では『間違えても、決して途中で止まらないこと』『シュタインウェイ・ピアノは力む必要が全くないよ』という指揮者の平光先生から言われたアドバイスを胸に、とにかく最後まで弾くことができました。

演奏終了後、『なかなか味のある演奏だった』とか『モーツァルトが大好きな気持ちがよく伝わってきた』さらには『遠路はるばる伺った甲斐がありすぎた』などと気恥ずかしくなるようなおほめのお言葉をたくさん頂きました。リハーサルではオケとうまく合わせられず、無謀にもこのような大曲を選んだことを後悔しましたが、やはりこの名曲に挑戦してよかったと思いました。令和2年6月4日 (記)

